

祈りましょう。

われらの王であり救い主である主イエス・キリストよ、われらは主をたたえようと、この枝を手に持ちつつ、おこそかに主の贊美を歌つた。願わくはおん慈しみによつて、この枝を持つてゆくどこにおいても、おん祝福の恵みをくだし、おん右手で悪魔の不義と欺瞞とを空しくさせ、主の救いたもうた人々を守りたまえ。おん父なる神と共に聖靈と一体をなし、世々にわたつて生きかつ治めたもう者よ。

それから紫色でミサ聖祭が始まるが、ご受難の朗説の時には、もはやみな前のように棕櫚を手に持たない。

### ミサ聖祭 De missa

指定参詣聖堂——ラテランの聖ヨハネ聖堂

紫色

このミサを、これに先立つ枝の祝別と行列をせずに行なう場合には、ご受難節中の各日のように階段のもとでする祈りを唱え、枝の祝別と行列をした場合には、司祭が紫の祭服に着かえて祭壇に帰り、階段のもとでする祈りを略してすぐそれにのぼり、香をくゆらし、それから入祭唱を唱える。

### 入祭唱（詩篇二二ノ二〇、二二一）

主よ、おん助けをわたしから遠ざけたもうな。わたしをかえりみて守りたまえ。わたしを獅子の口から、わたしの弱さを野牛の角から、救いたまえ。  
 （詩篇二二ノ二）神よ、わが神よ、わたしをかえりみたまえ。なぜ、わたしを捨てたもうたのか。わたしの罪のために、わたしは救いから遠いのである。  
 主よ、おん助けをわたしから遠ざけたもうな……

### 入祭祈願

全能永遠の神よ、主は人類に謙遜の模範を与えようと、われらの救い主を人とならせ、十字架にのぼらせたもうた。願わくは、その忍耐のみわざをわれらの身に効果あるようになし、われらをそのご復活に与かるに足る者となしたまえ。主と共に聖靈と一体をなし、世々にわたつて生きかつ治めたもう神であるおん子、このわれらの主キリストによりて。

きょうはこのほかの集祷文は唱えない。

## 使徒聖バウロのフイリッピ人への書簡の朗読（二ノ五一—二）

兄弟たちよ、あなたたちはキリスト・イエズスのような志をもつがよい。すなわちかれは神のかたちであらせられて、神と並ぶことを盗みとは思いたまわなかつたが、ご自分でないものとして奴隸の形を取り、人に似た者となり、うわべは人のように見え、みずからへりくだつて、死、しかも十字架上の死に至るまで、従順な者となりたもうたのである。それゆえ神もまたこれを高くあげて、一切の名にまさる名をこれに与えたもうた。（片ひざをつきながら）願わくは、イエズスのみ名に対しては、天上のものも、地上のものも、地獄のものも、ことごとくひざをかがめ、またすべての舌は、主イエズス・キリストが父なる神の光榮のうちにましますことを公言するようだ。

（答）神に感謝。

### 昇階唱（詩篇七二ノ二四、一—三）

主はわたしの右手を取り、み旨のままにわたしを導き、栄光のうちにわたしを迎え取りたもうた。（唱句）神はイスラエルに対し、心の正しい者に対し、いかにいつくしみ深

くましますことであろう。しかしわたしの足はほとんどよろめき、わたしの歩みはほとんどすべつた。それはわたしが罪びとの安らかなのを見て、不正な者をうらやんだからである。

### 詠唱（詩篇二二ノ二十九、一八、一九、二三、二四、三二）

神よ、わが神よ、わたしをかえりみたまえ、なぜわたしを捨てたもうたのか。（唱句）わたしの罪のために、わたしは救いから遠いのである。（唱句）わが神よ、わたしが昼にさけんでも、主は答えたまわらず、夜にさけんでも、わたしにみこころをとどめたまわない。（唱句）しかし主は聖所に住みたもう、イスラエルのたたえる者よ。（唱句）われらの先祖は主により頼んだ。より頼んだところ、果たして主はかれらを救いたもうた。

（唱句）かれらは主に呼びかけて救われた、主により頼んで恥を受けなかつた。（唱句）しかしわたしはうじ虫であつて、人でない、人々の侮り、民の捨てたものである。（唱句）わたしを見た者はみなわたしをあざ笑い、くちびるで物言い、頭をふつた。

(唱句) 「かれは主により頼んだ、主がかれを助けるがよい。かれを愛しているのだが  
ら救うがよい」

(唱句) かれらはわたしを見つめ、眺めた。かれらはわたしの衣服を分かち、わたしの  
下着をくじ引きにした。

(唱句) わたしを獅子の口から、わたしの弱さを野牛の角から、救いたまえ。(唱句) あなたたち、主をおそれる者よ、かれをほめよ。ヤコブのすべての子孫よ、かれをたたえよ。  
(唱句) 来たるべき代の人々は、主について告げられることがあるであろう。また天はその義を告げるであろう。(唱) 生まれるべき民、主の造りたもうたそれに。

### マタイによるわが主イエズス・キリストの受難

(マタイ二六ノ三六—七五。二七ノ一一六〇)

におおせられるには、「わたしの魂は死ぬばかり憂いでいる。あなたたちはここに留まつて、わたしと共に目ざめておれ」と。そして少し進んで行き、ひれふして祈りつつおおせられるには、「わが父よ、もしできるならば、この杯がわたしから去りますように。しかしわたしの意のままにというのではなく、思召しのままになりますように」と。それから弟子たちのもとに行き、かれらの眠っているのを見て、ペトロにおおせられるには、「このようにあなたたちは、一時間もわたしと共に目ざめていることができなかつたのか。誘惑におちいらないよう目ざめて祈れ。精神は早っても肉体は弱いものである」と。ふたたび行って、祈つておおせられるには、「わが父よ、この杯をわたしが飲まずに去ることができないならば、思召しが成就しますように」と。またふたたび行ってかれらを離れて行き、三度目にも同じ言葉を唱えて祈りたもうたが、やがて弟子たちの所へ行つておおせられるには、「いまはもう眠つて休め、さあ、時は近づいた。人の子は罪びとにわたされたのだ。起きよ、行こう、見よ、わたしをわたす者は近づいた」と。

なお語りたもう所へちょうど、十二人のひとりであるユダが来た。また司祭長や民間の長老らから遣された大群衆も、剣と棒とを持ってこれについて来た。イエズスを売った者はかれらに合図して、「わたしの接ぶんする人がそれである、かれを捕えよ」と言つたが、すぐイエズスに近づき、「ラビ、ただ今」と言つて接ぶんした。イエズスが劍を抜き、司祭長のしもべを打つてその耳を切り落としたので、イエズスがこれにおおせられるには、「友よ、なんのために來たのか」と。その人々が近づいてイエズスに手をかけて捕えた。するとイエズスと共にいた者のひとりが、手をのばして劍を抜き、司祭長のしもべを打つてその耳を切り落としたので、イエズスがこれにおおせられるには、「あなたの剣をさやにおさめよ。すべて剣を取る者は、剣で亡びるからである。わたしがわたしの父に求めることができないと思うか。父は必ずすぐに十二隊にも余る天使をわたしに与えたもうであろう。もしそうするならば、こうなるであろう」という聖書の言葉は、どうして成就しようか」と。

同時にイエズスが群衆におおせられるには、「あなたたちは強盜に向かうように、剣と棒とを持ってわたしを捕えに出て來たが、わたしは日々聖殿であなたたちのなかに座

つて教えていたのに、あなたたちはわたしを捕えなかつた。しかしすべてこのようになつたのは、予言者たちの書が成就するためである」と。この時弟子たちはみな、イエズスをおいて逃げ去つた。

人々はイエズスを捕えて、すでに律法學士や長老らの集まつていた司祭長カヤファの家に引いて行つたが、ペトロは遠くからかれに付いて司祭長の庭まで行き、成行を見ようとなつてはいり、しもべらと共に座つてゐた。司祭長らとすべての議員とは、イエズスを死刑にしようとしてこれに対する偽証を求める多くの偽証人が來たけれども、まだそれを得なかつたが、ついにふたりの偽証人が來て言つては、「この人は「わたしは聖殿をこわして、三日のちふたたびこれを建て直すことができる」と言いました」と。

司祭長は立つてかれに向かい、「この人々があなたに対しても證言したことに、あなたは何も答えないのか」と言つたが、イエズスが黙つておられたので、司祭長がかれに言つたには、「わたしは生きておられる神によつてあなたに命令する、あなたは神の子キリストであるか、われらに告げよ」と。イエズスがかれにおおせられるには、「あなたの

言う通りである。まことにわたしはあなたたちに告げる、こののちあなたたちは、人の子が全能であらせられる神の右に座し、空の雲に乗つて来るのを見るであろう」と。この時司祭長が自分の衣服をさいて言うには、「かれはぼうとくの言葉を吐いた。どうしてこれ以上証人がいろうか。あなたたちは今ぼうとくの言葉を聞いてどう思うか」と。かれらは答えて、「その罪は死刑に相当する」と言つた。

そこで人々はそのお顔に唾をかけ、こぶしで打ち、またある者は平手でお顔をたたいて言つには、「キリストよ、おまえを打つた者はだれか、われらに予言せよ」と。さてペトロが外で庭に座つていると、ひとりの女中が近づいて、「あなたもガリラヤのイエズスといつしょにいましたね」と言つたので、かれは大勢の前でこれを否定して「わたしにはあなたの言つことがわからない」と言つた。門を出る時、またほかの女中がこれを見て、居合わせる人々に向かい、「この人もナザレトのイエズスといつしょにいました」と言つたが、かれはまた誓つて、「わたしはあの人を知らない」と言つた。しばらくすると、かたわらにいた人々が近づいてペトロに言つた、「あなたもたしかにかれらのひ

とりだ、あなたの方言でもそれがわかる」と。そこでかれは「そんな人を知らない」とのろい、かつ誓い始めたところ、たちまち雞が鳴いた。こうしてペトロは、イエズスが一雞の鳴く前に、あなたは三度わたしを知らないといふだろう」とおおせられたみ言葉を思い出し、外に出てひどく泣いた。

夜明になつて、司祭長や民間の長老らは、みなイエズスを死刑にしようとして協議し、これをしばつて引き立て、総督ポンシオ・ピラトにわたした。その時かれをわたしたユダは、その宣告を受けたもうたのを見て後悔し、三十枚の銀貨を司祭長と長老らの所へ持つてゆき、それを返し、「わたしは無罪の血を売つて罪を犯した」と言つたので、かれらは言つた、「それがわれわれになんの関係があるか。おまえが自分で始末するがいい」と。かれは銀貨を聖殿の内に投げ捨てて去つたが、行って、なわでみずから首をくくつた。司祭長らはその銀貨を取つて、「これは血の価だから、賽銭箱に入れてはいけない」と言い、協議してこれで陶器師の烟を買い、旅びとの墓地にあつた。それでこの烟は、今日までもハケルダマ、すなわち血の烟と呼ばれている。

ここにおいて預言者イエレミアによつて言われたことが成就した。それは「かれらはイスラエルの子らに評価されたものの価値である銀貨三十枚を取り、陶器師の畠の代として与えた。主がわたしに示したもうた通りである」というのである。

さてイエズスが総督の前に立たれると、総督が問うていうには、「あなたはユダヤ人の王か」と。イエズスはかれにおせられた、「あなたの言う通りである」と。そして司祭長や長老らから訴えられたもうたけれども、なにもお答えにならなかつたので、ピラトはこれに「かれらがあなたに対していかに重大な証言をしているかを聞かないか」と言つたが、イエズスはひと言もお答えにならなかつた。それで総督はひどく怪しみだ。ところが祭日に当つて総督が、人民の望む囚人ひとりを赦す例があつたが、ちょうどその時バラバという有名な囚人がいたので、ピラトはかれらが集まると、「あなたたちはだれを赦してほしいのか、バラバか、キリストというイエズスか」と言つた。それは人がねたみによつてかれをわたしたことを見つけていたからである。さてかれが法廷に座つていると、その妻が人をよこして言わせた、「あなたはあの義人に関係なさらぬように。

わたしはぎょう夢のなかで、かれのためにたいそう苦しめられましたから」と。司祭長や長老らは人民に向かい、バラバを求めてイエズスをなき者にすることをすすめたが、総督がかれらに答えて「あなたたちはふたりのうち、どちらを赦してほしいか」と言つたところ、「バラバを」と言つたので、ピラトが「それではキリストというイエズスをわたしはどう処分しようか」とかれらに言つと、みな「十字架に付けよ」と言つた。総督は「しかしかれはどんな悪事をしたのか」とかれらに言つたけれど、かれらはますます叫んで、「十字架に付けよ」と言つていた。ピラトはそのなんの効もなく、かえつて騒動がますます激しくなるのを見て、水を取り、人民の前で手を洗つて言つた、「この義人の血についてわたしには罪がない、あなたたちが自分で責めを負え」と。人民はみな答えて、「その血はわれらとわれらの子どもの上にかかる」と言つたので、かれはバラバをかれらに赦し、イエズスをむち打たせて十字架に付けるためかれらにわたした。さて総督の兵卒らは、イエズスを役所に引き取り、全隊をそのもとに呼び集め、その衣服をはいで赤い上衣を着せ、いばらの冠をあんでその頭にかぶらせ、右の手に葦を持

たせ、その前にひざまずいて、「ニダヤ人の王よ、ご無事で」と言つてあざけり、またこれにつばきを吐きかけ、葦を取つてその頭を打つて立た。かれを嘲弄してのち、その上衣をはいでもとの衣服を着せ、十字架に付けようと引いて行つた。

出た時名をシモンというシレネ人に会つたので、強いてこれにその十字架をになわせた。そしてゴルゴタ、すなわちされこうべという所に着き、胆汁をませたぶどう酒をイエズスに飲ませようとしたが、これをなめただけで、飲もうとはされなかつた。かれらはイニズスを十字架に付けてのち、くじを引いてその衣服を分けたが、これは予言者によつて言われたことの成就するためであつた。それは「かれらはたがいにわたしの衣服を分け、わたしの下衣をくじ引きにした」というのである。かれらはまた座つてかれを守つていたが、その頭の上に「これはニダヤ人の王イエズスである」と書いた罪標をおいた。

さてこれと共に二人の強盗が、ひとりはその右に、ひとりはその左に、十字架に付けられたが、往來の人はかれをののしり、首をふつて、「ああ、聖殿をこわして三日のうちからおりよ。そうすればわれわれもかれを信じよう。かれは神を頼みとしている。かれを愛したものなら、いま救いたもうように！」かれは「わたしは神の子だ」と言つていたのだから」と。かれと共に十字架に付けられた強盗らも、同じようにかれをののしつついた。

その内に十二時から三時まで、地上はどこもみな暗やみとなつたが、三時ごろイエズスは声高く叫んでおおせられた、「エリ、エリ、ラマ、サバクタニ」と。これはすなわち、わが神よ、わが神よ、なぜわたしを捨てたもうたのか、という意味である。そこに立つていた者のうち、ある人々はこれを聞いて、「かれはエリアを呼んでいるぞ」と言つたが、やがてそのうちのひとりが走つて行つて、海綿を取り酔をふくませ、葦につけたてかれに飲ませようとしたところ、ほかの人は「待て、エリアが来てかれを救うかどうか

か、見よう」と言った。イエズスはまた声高く叫んで息絶えたもうた。  
 (しばらくひさますいて黙想する)

ちょうどその時聖殿の幕が上から下まで二つにさけ、地はふるい、岩はさけ、墓はひらけ、眠っていた聖人の死かばねが多数起きあがつたが、イエズスの復活ののち、墓を出て聖なる都に行き、多くの人に現われた。百夫長、およびこれと共にイエズスを守っていた人々は、地震や起こった事を見て、ひどく恐れ、「かれは本当に神の子であった」と言つた。さてそこには、ガリラヤからイエズスについて来てその用をしていた多くの婦人が、離れて立つてゐたが、そのなかにはマグダレナ・マリア、ヤコボとヨセフとの母マリア、およびベデオの子らの母もいた。

夕暮になると、アリマタヤの金持でヨセフという人がピラトのもとへ来て、自分もイエズスの弟子であつたので、イエズスの死かばねを求めたところ、ピラトはそれをわすように命じた。それでヨセフは死かばねを取つて清い布に包み、岩に掘つた新しい墓におさめ、その墓の入口に大きな岩をころがしておいて立ち去つた。

同じ司祭がこの主日に、二つまたは三つのミサを行なう時には、その一つで所定のご受難の記事を読むだけで、他のミサの聖福音には、次を朗説するよう指定してある。

### マタイによるわが主イエズス・キリストの受難

(マタイ二七ノ四五—五二)

人々がイエズスを十字架につけてのち、十二時から三時まで、地上はどこもみな暗やみとなつたが、三時ごろイエズスは声高く叫んでおおせられた、「エリ、エリ、ラマ、サバクタニ」と。これはすなわち、わが神よ、わが神よ、なぜわたしを捨てたもうたのか、といふ意味である。そこに立つていた者のうち、ある人々はこれを聞いて、「かれはエリアを呼んでいるぞ」と言つたが、やがてそのうちのひとりが走つて行つて、海綿を取り酢をふくませ、葦に付けてかれに飲ませようとしたところ、ほかの人は「待て、エリアが来てかれを救うかどうか、見よう」と言つた。イエズスはまた声高く叫んで息絶えたもうた(しばらくひさますいて黙想する)。

ちょうどその時、聖殿の幕が上から下まで二つにさけ、地はふるい、岩はさけ、墓はひらけ、眠っていた聖人の死かばねが多数起きあがつた。

ご受難の記事の朗説に統いて、クレドを唱える。

わたしの心は恥辱と悲慘とを待ち設けていた。わたしは共に悲しもうとする者を待つたが、ひとりもなく、わたしを慰めようとする者を探したが、ひとりも見あたらなかつた。かえつてかれらは食べ物として苦胆をわたしに与え、わたしが渴くと酔をわたしに飲ませた。

## 奉納祈願

願わくは主よ、われらが主のみいすに対しておさげしたいけにえが、われらに敬虔の念を起こす恩恵と、永遠の幸福とをもたらすように。主と共に聖靈と一体をなし、生きかつ治めたもう神であるおん子、われらの主イエズス・キリストによりて。

## 聖体拝領唱 (マタイ二六ノ四二)

父よ、この杯をわたしが飲まずに去ることができないならば、思召しが成就しますよう。

## 聖体拝領祈願

祈りましょう。

主よ、この聖祭の功德によつて、われらのあやまちを絶やし、正しい望みを満たしたまえ。主と共に聖靈と一体をなし、世々にわたつて生きかつ治めたもう神であるおん子、われらの主イエズス・キリストによりて。

(答) アーメン。

## 聖週間の月曜日

Feria secunda hebdomadæ sanctæ

## ミサ聖祭

指定参詣聖堂—聖ブラクセデス聖堂

## 入祭唱 (詩篇三四ノ一一)

紫 色

---

昭和5年4月10日 初版発行  
昭和8年9月25日 二版発行  
昭和13年3月5日 三版発行  
昭和31年3月5日 改正四版  
昭和35年3月1日 五版発行  
昭和40年2月28日 改正六版印刷  
昭和40年9月20日 改正六版発行

定価 180 円

.. 不許複製 ..

編集発行者 光 明 社

札幌市北十二条東二丁目

編集発行代表者 ブライアン

札幌市北十二条東三丁目

印刷者 長内タ力

札幌市北十二条東三丁目

印刷所 天使院印刷製本部

札幌市北十二条東二丁目

発行所 光 明 社

振替 小樽四六六四番

---